

第 20 章 沙漠の洪水(前編):1965 年(28 歳)

概要

1965 年 1 月初旬、この世の終わりのような豪雨がアウレフを襲った。当地では水は極めて貴重で、我々は一滴滴を大切に使って生きて来た。しかし、皮肉なことに、普段なら有難いことこの上ないはずのその水が、洪水となって我々を襲ってきたのだ。何年も干上がっていたウエッド(涸川)に水流が蘇り、濁流となって町まで押し寄せた。何百年来変わらず存在し続けて来た堅牢なフォガラでさえ、一部の壁が崩れ落ちてしまった。電話線が寸断され、近隣の町へ通じる道路も泥の中に埋まり、一時アウレフの町は外界から完全に孤立した。町の家々は、粘土を干し固めただけのレンガで出来ていたので、一つの例外もなく溶けて崩れた。住むところを失った人々は、ラジオ局、発電所、気象観測所、病院など数少ないコンクリート製の建物に難を逃れてひしめき合い、そこで何週間も非難生活を余儀なくされた。学校も避難所となり、そのため三週間ほど授業は休みとなった。私の家族も例外でなく、病院の一室で一カ月余りを過ごした。食糧も家畜も泥に埋まり、外部からの応援がくるまでは全く酷い状況だったが、一方で、私はこの時ほど、アウレフの住民が相互扶助の精神で固く結びついたのを見たことがない。



洪水後の町の様子(著者提供)

異常降雨

天気がおかしくなり始めたのは、前年 1964 年末の 12 月 20 日頃のことだった。この頃から毎日霧雨が降り始めたのだ。初めは一日に 1 時間か 2 時間細かい雨が降り注ぐだけだった。後から思えば、これは後に続く天変地異の先触れだった。

1965 年 1 月 8 日夜、すでに町の全てが連日の霧雨でぐっしょり湿っていたが、止めを刺すように大攻勢が始まった。雨というより滝が頭の上に落ちてきていると言った方がいいだろう。しかし、沙漠での普通の嵐とは異なり、稲妻も光らず雷鳴も轟かず、世界は静まり返っていた。私たち沙漠の住民は、こんな風に雷を伴わず、静かにひたすら降り続ける雨を見たことがなかった。私は、空から降る雨の音は、水道の蛇口から流れる水の音に似ていると思った。いつもなら雨は、雨粒が一滴一滴目に見えるような降り方をするが、この時はまるで違っていた。豪雨の中を外に出て行った時は、透明な壁が出現し、それを突き破っていくように感じられた。天の底が抜けたのか？この世の終わりが来たのか？これは神の下された罰なのか？我々は全員溺れ死ぬのだろうか？預言者ノアの言葉を信じずに溺れ死んだ太古の人々のように？

翌朝、事態は危険な様相を呈し始めた。干しレンガで作った家々は、ついにチョコレートのように溶け始めた。しかし、私たちにはどうすることも出来ず、圧倒的な自然の力を前にして、言葉もなく、ただ互いに顔を見合わせるばかりだった。目の前で、家が一つ、また一つと崩れて行った。私たちは大雨の中を逃げ出した。食糧や家畜は瓦礫の下に飲み込まれて行ったが、それらを救いに家屋の中に入って行くのはあまりにも危険だった。皆が安全な場所を求めて町の中を逃げ惑った。地面はもはや雨を吸いこみ切れず、溜まった水はくるぶしまで達した。誰もが不安で押しつぶされそうだった。

乾燥が当たり前の世界にあって、私たちはまさかこんな日が来るとは夢にも思わなかった。我々の住居に使われている、トゥブス (toubes) と呼ばれる粘土と砂で作った干しレンガは、当然のことながら水の前にはひとたまりもない。この建材は、夏の暑さを遮ることだけを目的として考え出されたのだから。しかし、我々も、我々の祖先も、干しレンガの家の中でなんの不都合も感じず暮して来た。当地では、少なくとも過去一世紀、この時の豪雨に匹敵するような雨は降っていない。90 歳を超えた古老も、こんな雨は見たことはもちろん、過去にあったという話も聞いたことがないと言った。

溶けてしまったアウレフの町

大雨は結局 36 時間、一日と二夜絶え間なく降り続いた。1 月 10 日午前 10 時頃、天はようやく気が済んだと見えて、雨は段々小降りになって来た。何人も

の人々が、誰かの名を呼びながら、町の中を走り回っているのが見えた。避難するところを探して歩き回っている女たちもいた。しかし、一体どこに行ったらいいのか見当もつかないという風であった。

雨は上がったが、アウレフの町は外界から完全に孤立していた。電話線は切れ、郡役所の無線機も水をかぶって使い物にならなかった。何度も西のレガンヌか、東のインサラーへ通車で急を知らせに行こうと試みたが、泥の海に阻まれて進むことが出来なかった。サハラの大漠は水を吸いやすい砂地である。そこに水溜りが出来ると言うことは、地下の地層がもはや水を吸い込めなくなっているということである。一体どれほどの量の雨がふったのだろう。我々は地元の住民の力だけで大災害の後始末を始めた。FLN（独立民族戦線：当時アルジェリア唯一の合法政党）アウレフ支部の青年部がイニシアティブを取り、自分たちで可能な限りの救助や救援活動に当たった。当時町の病院には、フランス人の医師が一人いるだけだったが、彼も我々アルジェリア人に立ち混じり、怪我人や病人の手当てに全力を傾けた。若者たちも、この医師の指示に従い、よく働いた。地元で集められた食糧の配給も開始された。まず被災者は郡の集会所に集められ、次に女性と子供のグループと、男性のグループに分けられた。当時アウレフにある丈夫な建物は、気象観測所、ラジオ局、トタン屋根の格納庫 2 棟、男子学級の校舎、病院、鉄筋造りの小屋 2 棟だけだった。

豪雨から 4 日目の 1 月 11 日朝、雲の切れ間から青空がのぞいた。久方ぶりで見ると日の光だった。雲は段々と消えて行き、正午ごろには青い空に太陽が輝き始めた。皆が安堵した表情で空を仰いだ。沙漠の砂地は急速に溜まった水を吸収し、地表は急速に乾いて行った。住民たちは、ようやく安心し、家や家畜の様子を見に行ったり、別れ別れになってしまった家族を探しに行ったりした。当地の建物はどこも、既に溶けて崩れているか、あるいは、まだ残っているところも、いつ崩れ落ちてもおかしくない状態だった。実際、あちからもこっちからも、壁が崩れる音が聞こえて来た。役所は住民に、家屋の下敷きになる危険があるから、しばらく避難先から家へは戻らないよう勧告を出した。しかし、一部の頑固者たちは聞く耳を持たず、泥に下敷きになって 8 人が死に、3～4 人が行方不明になった。家畜も一部は泥の下敷きになってしまっていた。人々は生き残った家畜を、とりあえずナツメヤシの木につないだ。しかし、行方知れずの家畜も多かった。おそらく盗まれたのだろう。実際我々は飢えに直面しており、不心得者がよからぬ考えをおこしたとしても無理はなかった。

そうした中、サラール・エル・ハジ・アーメッドという男が、私がいた所に助けを求めて駆け込んで来た。女性が一人崩れた家の下敷きになったというのだ。20 人ほどが救助に向かった。その事故現場の周りの道は幅 1.5m ほどしかなく車両は入れなかった。一刻を争ったが、救助者が二次災害に巻き込まれるのは

避けなければならない。救援に駆けつけた者たちが瓦礫を取り除き始めた。時折、どこかで壁か屋根の崩れ落ちる音が聞こえて来た。皆生きた心地がしないという表情で作業を続けていた。作業を開始してから少しして、瓦礫の下から濡れた女性の髪が現れた。「顔を！顔を速く掘り出せ！」と誰かが叫んだ。頭が泥の中から引き出されると、間髪を入れず医師が飛びついて人工呼吸を始めた。彼は息を吸っては吹き込み、吸っては吹き込みを繰り返した。こんな状況だったが、私は何故だが、鳩の親鳥が雛に餌を与える様に似ていると思った。女性は息を吹き返さなかった。私たちは、とにかく彼女の体を土砂の中から掘り出した。この時は、救助活動者の中からも一人負傷者が出て病院に運ばれた。



洪水の被害状況 (著者提供)



参考資料：建材として使うためナツメヤシの幹を干しているところ（2002 年記者撮影）。1965 年の洪水の当時は、少なくなっていたと思われませんが、当地の伝統家屋は干しレンガで壁を築き、その上にナツメヤシの木を梁として渡し、その上にナツメヤシの葉を乗せただけのものでした。